

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大原中学校】

学力向上 アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1)【知識及び技能】基礎知識の確実な定着と活用 各教科の基本語彙や概念を理解し、ICTを活用して必要な情報を正しく選択・整理する力。 (2)【思考力・判断力・表現力等】根拠に基づいた論理的記述力 図表や文章などの複数の資料を関連付け、自分の考えを「根拠」と共に論理的に構成し表現する力。 (3)【学びに向かう力・人間性等】自己調整学習の推進 端末上の学習履歴やテスト結果を生徒が分析し、自身の課題に合わせて学習方法を自ら改善しようとする態度。
↓	↓
実施する学力向上策 【時期・頻度】 (2月)	(1)【授業改善】根拠を明確にする「型」の定着。「結論+根拠」という記述の型を全教科で共通指導し、デジタルノートでの相互評価(リフレクション)を日常化する。通年(毎時間)。全教科・全生徒。スプレッドシート等の共有機能を活用。 (2)【個別学習】データに基づく「学びの個別化」。AIドリルやCBTの結果から自身の弱点を把握し、個別に課題を選択して取り組む「自由進捗学習」の時間を設定する。1単元に1度程度。総合的な学習の時間や各教科の単元末。 (3)【組織対応】D-PDCAサイクルによる指導改善。学調等のデータを可視化し、記述問題の正答率が低い課題に対し、学年・教科等横断で改善策を協議・実行する。年3回(各期)。職員会議・校内研修(定期テストや学調の時期)。

⑤	年度末評価結果分析(2月)
学力向上策の 実施状況	評価(※) ①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等
↓	↓
今年度の成果と 次年度の課題	さいたま市学習状況調査(学力) <小3~中3>(1月)

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	調査の振り返り(4月) ①児童生徒による振り返り ②調査問題の解説 ③振り返りの終了報告
↓	↓
結果から考えられる 児童生徒の実態	学力向上策の実施 ①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト 等の分析・活用 ③調査問題を活用した授業

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	学力向上策の充実 ①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト 等の分析・活用 ③中間評価を経ての取組 ④調査結果を活用した授業
結果から考えられる 児童生徒の実態	第2回 学習状況調査研修 学力向上支援研修

③	中間評価
学力向上策の 実施状況	評価(※) ①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 夏季職員研修等
↓	↓
学力向上策の 見直し	中間評価(9月) 課題・策の見直し

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大原中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	習得した知識を「点」から「線」へとつなげ、より確実な定着へと昇華させることにある。学年が上がるにつれて学習内容が複雑化・高度化するため、基礎知識のわずかな欠落が、後の大きなつまずきに直結する懸念がある。特に数学や理科など、前の単元の理解が次の学びに影響する教科においては、定着に個人差が生じないよう、さらにきめ細やかな習得確認が必要である。今後は、ICT端末等も活用しながら、個々の理解度に応じた定着支援を強化する。単なる暗記に留まらず、知識を正しく使いこなせる状態を目指し、短時間での振り返りや効果的な復習の機会を設けることで、基礎学力の質をさらに高めていく。	
思考・判断・表現	理科における実験結果の考察や、数学の記述式問題における論理展開など、より高度で抽象的な思考を要する場面にさらなる向上への余地が残されている。全教科を通じて「書く活動」の質を一層重視する。具体的に、結論に至るプロセスを可視化する思考ツールの活用や、自分の考えを論理的に組み立てるトレーニングを強化する。特に理科などの観察・実験においては、予想と結果の乖離を自分の言葉で論理的に説明する場面を増やし、高次の思考力と表現力を兼ね備えた、より深い学びの実現を目指す。	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題>基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が二極化している。 <指導上の課題>一問一答形式の問題の正答率は高いが、その根拠を基にした問題に対する知識を徹底できるような時間が足りない。	⇒ ・学習者主体の授業への改善を図り、生徒自身が主体的に、「知識及び技能」を獲得し、「思考力、判断力、表現力等」を働かせる授業づくりの実践【単元ごとに設定】 ・生徒一人ひとりの気付きを大切にし、教科等横断的な視点に立ち、多面的・多角的なアプローチで、個別最適な学びを実現する。【毎時間設定】
思考・判断・表現	<学習上の課題>物事を筋道立てて考えることに改善の余地がある。 <指導上の課題>主張を述べるだけでなく、他者の考えの理由を聞くことがやや不十分であり、深い学びが不十分である。	⇒ ・自ら気付いた事柄について、主体的に他教科の学習内容と関連付け筋道立てて掘り下げていくことで、教科等横断的な視点に立ち、探究的な学び(じしやく)の視点を取り入れた授業の実施【毎時間設定】 ・自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり、表現を工夫して書いたりすることに力を入れる。【毎時間設定】

全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	生徒が自身の習得状況をメタ認知し、主体的に基礎を固める「個別最適な学び」の環境づくりを重点的に行った。具体的には、ICT端末を活用したドリル学習や、単元ごとのセルフチェックシートを導入し、生徒が「自分は何かできて、どこに課題があるか」を把握した上で、自ら復習に取り組める時間を設定した。今後の課題は、習得した知識を長期的に保持し、必要な場面で自在に活用できる「質の高い定着」である。生徒が自ら学んだ知識を関連付け、体系化できるよう振り返りの時間をさらに充実させる。生徒が自律的に知識をアップデートし続ける「学び方」の習得を支援し、さらなる学力の下支えを図る。
思考・判断・表現	B	生徒が自ら問いを立て、多様な視点から解決策を導き出す「協働的な学び」の実践が実を結んでいる。授業では、教師が解法を提示する前に、生徒が資料や事実を基に仮説を立て、対話を通して考えを深めるプロセスを重視した。今後は、生徒が試行錯誤の過程を可視化できるように思考ツールの活用を日常化し、失敗を恐れずに多様なアプローチを試みる「探究的な態度」をさらに醸成していく。生徒一人ひとりが、自らの思考の枠組みを広げ、複雑な課題に対して主体的に立ち向かえる表現力の育成を目指す。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、「文脈に即して漢字を正しく使うことができる」問題に課題がみられた。また、数学の「数と式」において、「素数の意味を理解している」問題に課題がみられた。言葉や文の意味を考える習慣をつけたり、数学用語を自分の言葉で説明する練習を、授業内で実践していくことが大切だと感じる。「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできる」との問いに肯定的な回答の割合は87.6%であった。協働的な学びを通して、深い学びに繋げていきたい。	
思考・判断・表現	国語の「読むこと」において、「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考える」問題に課題がみられた。また、数学の「数と式」において、「式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明する」問題に課題がみられた。「話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりする」との問いに肯定的な回答の割合は90.4%であった。論理的思考力や批判的読解力を鍛えるためにも、学習者主体の授業を今後目指していく。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	全学年・全教科で市平均を上回る中、定着が極めて高い。第1学年の数学や第2学年の国語では、基礎的な用語や計算、漢字の習得が学力の下支えとなっている。基礎的な公式や用語の理解は進んでいるものの、それらを組み合わせで解く「定型問題」でのケアレスミスや、定着の個人差が僅かに見られる。今後は、これら習得した知識を確実に「自動化」させるため、ICT端末を活用したドリル学習や短時間での定着確認テスト(小テスト)を継続し、中層以下の生徒が「わかっているが解けない」状態にならないよう、個別のフィードバックをさらに充実させる必要がある。	
思考・判断・表現	社会科を中心に良好な結果が得られた。資料から情報を抽出し、根拠を持って記述する設問において、第1学年では市平均を上回るなど、論理的思考力の基盤が全校的に醸成されている。理科に代表される「未知の事象への応用力」である。両学年とも理科の正答率は5割以上に留まり、特に実験結果から法則性を導き出すような「思考・判断・表現」の高度な設問で正答率が伸び悩む傾向にある。今後は、全教科で「既習事項を活用して未知の課題を解決する」場面を意図的に設定する。具体的には、根拠を明確にした言語活動を強化し、単なる知識の再生に留まらない、高次の思考力を伴う学力の伸長を図る。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	PCでの「ミライシード」の利用やミニテスト、伝え合いの時間を多く取り入れることにより、基礎的・基本的な知識・技能の習得を目指した授業を実施している。	変更なし
思考・判断・表現	B	各教科内で公開授業を行い、実践できる「学習者主体の授業」とはなにか、協議を行った。講師を招いた研修会を行い、探究的な学び(じしやく)の視点を取り入れた授業を実施している。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)